

2026年AI競争の転換点：自律型エージェントの台頭と米中勢力図の変容

2026年1月、Alibabaの「Qwen3」やMoonshot AIの「Kimi K2.5」の登場により、AIは単なる対話ボットから、自律的にツールを使いこなしタスクを完遂する「大規模工エージェントモデル (LAM)」へと進化しました。米国による半導体規制下で、中国勢はソフトウェアの革新と圧倒的なコストパフォーマンスを武器に、AI競争の主導権を握りつつあります。

知能 (IQ) から実務遂行力 (エージェント) へのパラダイムシフト



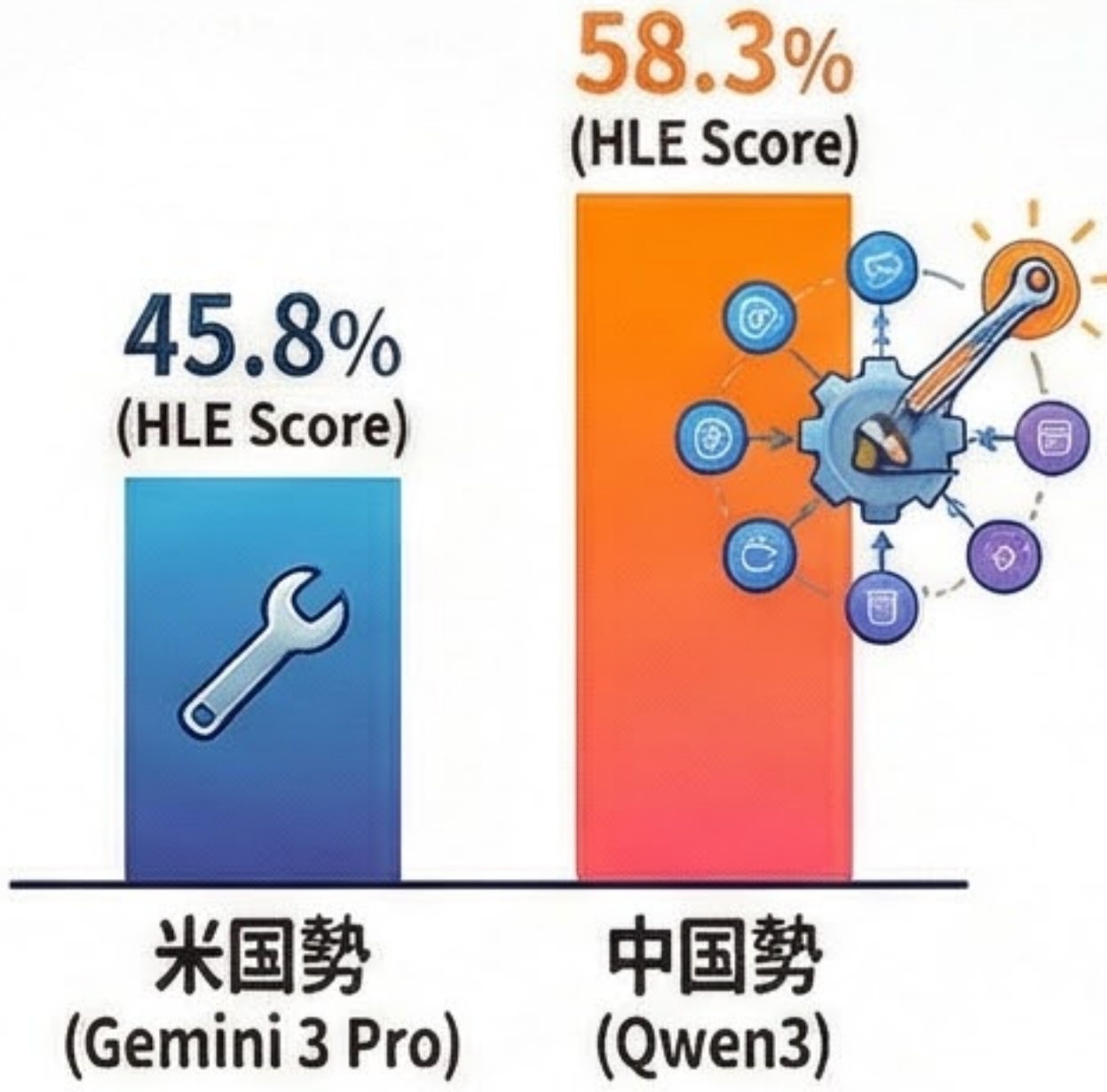
受動的な応答者
(Knowledge/IQ)

AIの役割が記憶の記憶から、外部ツールを自律的に使いこなす能力へ移行。

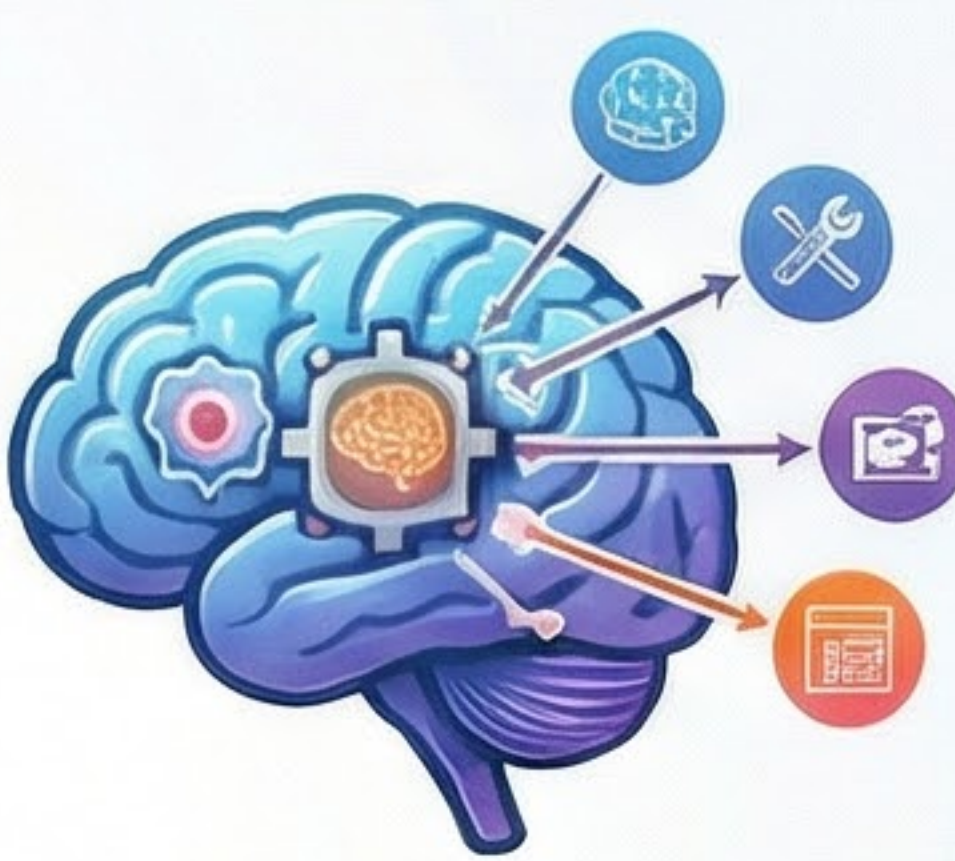


能動的な労働者
(Action/Agents)

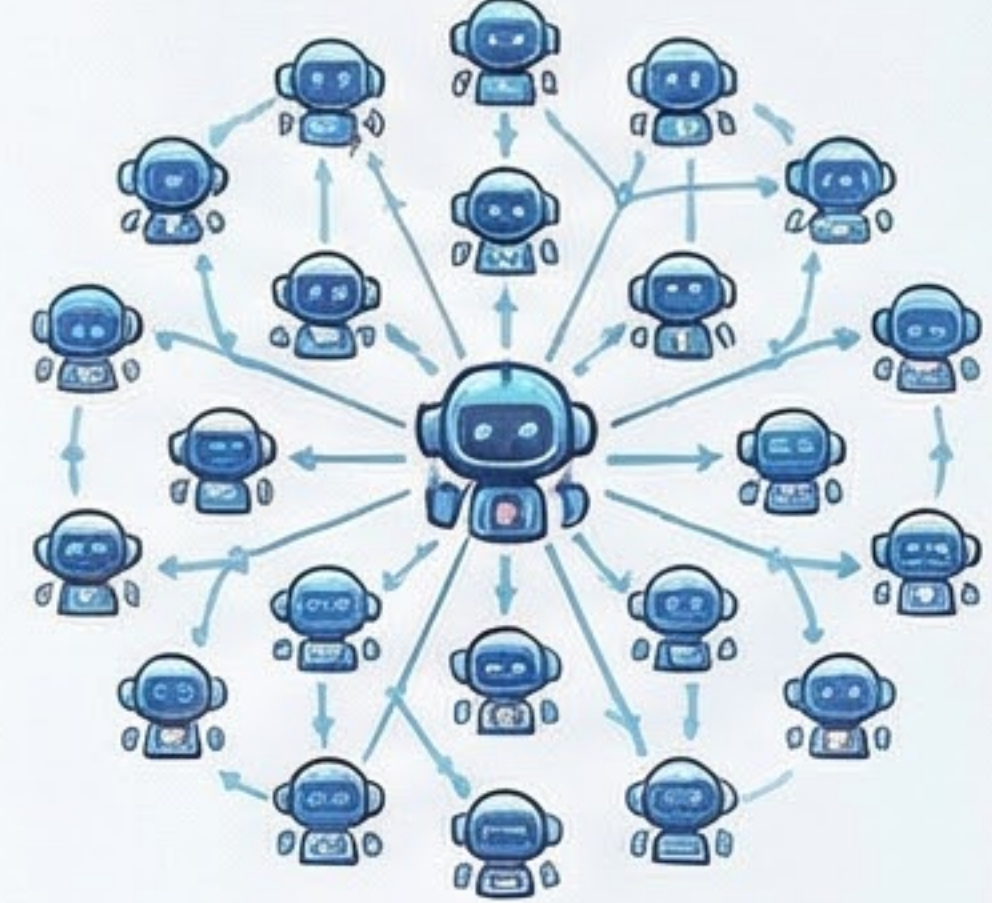
実務能力 (HLEスコア) での逆転現象



中国勢の2大革新：ツール統合型思考と群知能



Qwen: 思考プロセスにツール呼び出しを埋め込み、タスクを完遂する



Kimi: エージェント・スウォーム(最大100体) 最大100体のエージェント群により、複雑な課題を並列で解決する

米中主要モデルの性能とコスト比較

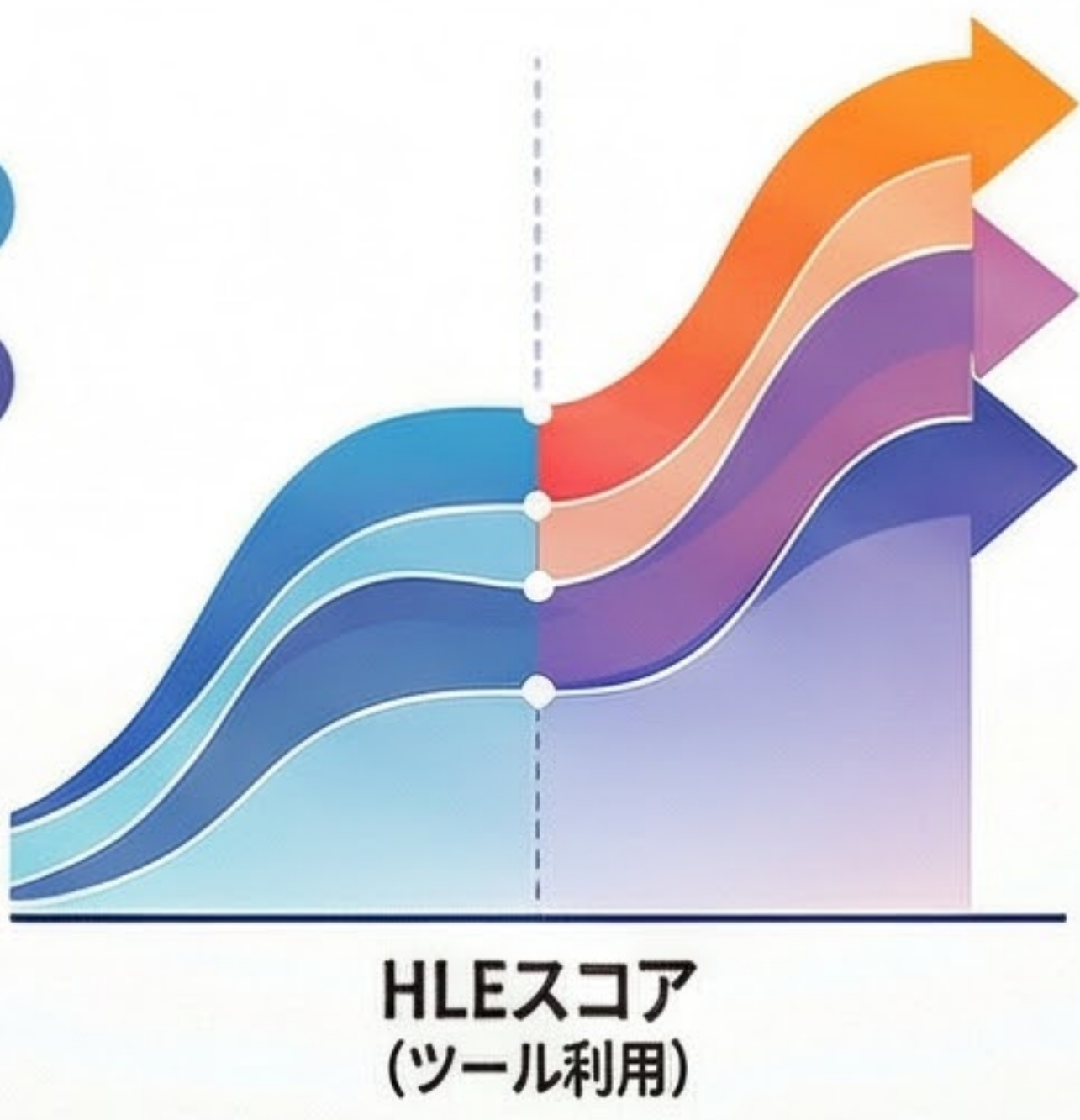


米国 (Gemini 3 Pro)

コスト (高額)

\$ 入力: \$2.00/1M

\$ 出力: \$12.00/1M



規制下での効率化 (MoEアーキテクチャ)



Kimi K2.5 (Moonshot AI)

\$ 入力 \$0.60/1M

\$ 出力 \$3.00/1M

中国 (Qwen3 & Kimi K2.5)



圧倒的なコストリーダーシップ

Qwen3 (Alibaba)

\$ 入力 \$1.20/1M

\$ 出力 \$6.00/1M

中国勢は、米国勢の1/2～1/10という複層的な低価格で高性能な課題を提供。

